

# 令和4年度 「青少年の家」不登校対策事業 第1回ふれあいキャンプ 事業報告書

担当：小俣

## 1 事業概要

### (1) 趣 旨

不登校傾向にある児童生徒の活動意欲、コミュニケーション力、自己肯定感の向上と社会的自立を図るため、不登校の状態に応じた段階的な活動機会の提供と相談対応を行い、年間を通じた居場所を構築する。

(SDGs との関連)



4 質の高い教育をみんなに



10 人や国の不平等をなくそう



14 海の豊かさを守ろう



15 陸の豊かさも守ろう



17 パートナリーシップで目標を達成しよう

(2) 対 象 不登校の小中高生で、本人の参加意志のある者20名程度

(3) 実施期日 令和4年6月18日(土)～19日(日)

(4) 実施場所 大分県立香々地の青少年の家

(5) 参加者数 29名(児童生徒 9名、保護者・スタッフ等20名)

(6) 講 師 大分大学教授 溝口 剛 氏(スーパーバイザー)

(7) 支 援 者 大分大学学生13名

### (8) プログラム

#### ① 出合いのつどい「アイスブレイキング」(視聴覚室)

大学生ボランティア(以下、メンタルフレンドという)との出合いの場である。アイスブレイキングもかねて、メンタルフレンドに「わたしが元気になることば」というテーマでスピーチを行ってもらった。メンタルフレンドは、子ども目線で話をし、参加者も話を熱心に聞いていた。



事前のMF打ち合わせ会

#### ② 活動1「磯観察」(海水浴場先地磯)

海の豊かさを実感できる磯観察は、開放的な環境と相まって、様々な生物を発見するたびに、自然と参加者も心を開く。歓声をあげながら、めずらしいウニやアメフラシなど、図鑑をめくりながらメンタルフレンドと額を突き合せて調べる姿が見られた。

捕まえた生物は、海へ返すのがルールであるが、名残惜しように何度も触ったり眺めたりしていた。



出合いのつどい直前コミュニケーションをとり互いを知る

#### ③ 「のんびりタイム」(レクリエーション室・創作室・談話室・アスレチック)

のんびりタイムは、自己選択・自己決定をねらいとした自由選択活動の名称である。メンタルフレンドが、参加者の意思を確認、または選択肢を提示し、一緒にバトミントンや卓球の他にオセロ、トランプ、カードゲームなどの遊びを行った。

この頃になると、メンタルフレンドのつながりが強まるとともに、多くの参加者のしている遊びに合流したり、自分の遊びに誘ったりと、参加者相互の交流する場面も生まれるようになっていた。



出合いのつどいでのMF自己紹介



磯は発見の連続  
自然と互いの距離も縮まる

#### ④「保護者懇談会」（談話室）

保護者・施設職員・アドバイザー7名の参加（初参加保護者1名）があった。子どもの家庭での様子や悩んでいることなどが語られ、思いを共有する場となった。

#### ⑤活動2「プラネタリウム・星空観察」

保護者懇談会と同じ時間帯で行った。プラネタリウムで星空の話聞きながら、季節の星座について興味をもった子どももいたようだった。

このころになると、メンタルフレンドとの距離もだいぶ縮まり、気さくに感想を述べ合う姿が見られた。

#### ⑥「メンタルフレンド会議」（談話室）

1日の子どもたちの様子や、メンタルフレンドの振り返りの場として設定している。

一日をふりかえりながら、課題や困っていること、成長が見られた点など、様々な視点で子どもの様子を出し合い共有することができた。は熱心にメモをとりながら、翌日の活動につなげるための意見や指導を受けていた。

#### ⑦活動3「農業体験」

香々地青少年の家近隣の畑作地を提供していただき、サツマイモ植えを行った。

といってもある程度開墾された場所の石拾いから始まり、畝づくり、マルチシート張りなど、かなり高負荷な内容であった。

当日の天候が快晴であったことも加わり、暑さときつさで、早々に日陰で休憩する子どももいれば、終始鍬を持ち汗を流しながら作業に取り組む子どももいた。活動への意欲は子どもによって違いはあるが、根気強くメンタルフレンドから声かけが行われたこともあり、全員がイモの苗植えまでの作業に参加することができた。

#### ⑧別れのつどい（まとめ・振り返り）

つどいの前に参加者は、アンケート用紙を使いまとめ・振り返りを行った。メンタルフレンドの感想発表、また、参加者の感想発表が行われた。参加者の感想では、ふれあいキャンプで楽しい思い出ができたこと、メンタルフレンドへの感謝の思いが発表された。参加者から次も参加したいという声も聞かれた。



「のんびりタイム」思い思いに楽しむ姿が見られる



SVを交えての保護者懇談会



真剣な表情でのMF会議



きつい作業もMFの励ましてなんとか最後までやり遂げた

### (9) 事業評価

#### ○参加者アンケート集計（回答数：8）

##### ・プログラムについて

	内 容	楽しかった	少し楽しかった	あまり楽しくなかった	楽しくなかった
①	磯観察	7	0	1	0
②	のんびりタイム	7	1	0	0
③	プラネタリウム・星空観察	4	3	0	1
④	サツマイモ植え	4	1	2	1

##### ・自分の事について

	内 容	できた	少しできた	あまりできなかった	できなかった
①	積極的に取り組む事ができた	4	3	1	0
②	MFと話ができた	7	1	0	0
③	キャンプを楽しむことができた	6	2	0	0
④	まわりの力をかりずに活動できた	5	2	1	0

## 2 成果と課題

### (1) 成果

- ・アンケートからも分かるが、「のんびりタイム（自由選択活動）」での満足度が高く、重要な活動であることが分かる。不登校または不登校傾向にある子どもにとってメンタルフレンドとのつながりを深める時間であるとともに、自己選択・自己決定を促す機会となった。
- ・メンタルフレンドのかかわり方が、子どもの様子や特性をよくとらえた上で考えられた言動であった。メンタルフレンド会議や提出された記録をみると、子どもの行動に対して理解し、声かけや行動などの働きかけを行っていることが分かる。
- ・メンタルフレンドによる参加前後の変容についてのアンケートによると、特にコミュニケーションや自己肯定感に関する変容が大きかったことが分かる。

- ・IKR 調査では、以下の通りの分析結果となっている。

＜質問項目別平均点比較（28項目）＞

28項目中15項目において平均点↑・・・53.6%

＜生きる力全般＞

「生きる力」の変容・・・・・・・・7.1ポイント↑（有意差なし）

＜生きる力3つの上位能力＞

「心理社会的能力」の変容・・・6.5ポイント↑（有意差あり）

「徳育的能力」の変容・・・・・・・・変化なし

「身体的能力」の変容・・・・・・・・0.6ポイント↑（有意差なし）

- ・心理社会的能力の変容に有意差が認められた中でも、下位能力として最も変容（平均点比較）が大きかったのは「視野・判断」の能力「先を見通して、自分で計画を立てられる」（事前3.5→事後4.6）であり、1.1ポイントの向上が見られた。これは、メンタルフレンドによる「子どもの主体性を尊重する」かかわり方と、「自己決定が実感できる」のんびりタイムの設定が背景にあると思われる。また、質問項目別平均点において向上が大きかったものは、上記の「先を見通して、自分で計画を立てられる」とともに「からだを動かしても疲れにくい」であった（ともに1.125ポイント向上）。これは、農業体験をやり遂げたことに起因すると考えられる。

### (2) 課題

- ・メンタルフレンドとのつながりは十分に深めることができるが、参加者同士のつながりを深めるには、参加者数が少ない。ある程度の集団（15～20名）であれば、新たなかかわりが期待できるのではないかと考えられる。また、四六時中離れず活動・生活するのではなく、メンタルフレンドや保護者から短時間離れ、子ども同士のみの時間が生まれる人数であることも自立を促すことにつながるのではないか。
- ・新規参加者を増進するために、こまめにメーリングリストを活用した周知や募集を行う必要がある。複数回参加してもらうことと、新たな参加を促進することを並行して増進することで、それぞれ相互の出会いや新たな人間関係を生み出すことに期待がもてる。そのために、トライアルデー・活動日・サマーキャンプという3つの活動を効果的に実施していくことが重要である。